

シラーの『オルレアンの乙女』について

江 坂 哲 也

はじめに

この主人公は歴史上の人物ジャン・ダルク (Jeanne d'Arc 6. 1. 1412- 30. 5. 1431)¹ で、「ダルク」は彼女の父親の姓「アルク」に「の」を表す <de> が前につき、リエゾンしているので、「アルクのジャン」とでもなろう。彼女は 13 歳のとき神の声を聞き、その後故郷の村ドンレミ (Domrémy) を後にし、1429 年自らを「ジャン・ラ・ピュセル」(Jeanne la Pucelle, Pucelle は「乙女」の意であるから「乙女ジャン」と名乗り、突然世界史上に姿を現わす。すなわち、その年の 5 月、彼女はフランス太子の軍を率いて、イギリス軍に包囲され陥落寸前であったオルレアンを解放し、さらにその太子をランス (Reims) で戴冠させ、シャルル 7 世 (Charles . . . 国王在位 1422/29-61)² として正式な国王にしたのである。その後も彼女は休むことなくイギリス軍を追い出すために戦うが、様々な政治的策謀の中で敵方に捕えられ、宗教裁判にかけられ、1431 年 5 月 30 日ルアン (Rouen) の広場で異端・魔女として火刑に処され、19 歳の若さでこの世を去った。英仏の「百年戦争」(la guerre de cent ans 1337-1453) の後期に突然現れ、祖国フランスをイギリスの暴力的支配から解放したこの乙女は、その死後も国民の間に広がる伝承の中で生き続けた。オルレアンの人々は町を救ってくれた彼女を英雄として扱い、現在その市を訪れれば、彼女の騎馬像や火刑のレリーフ像、そして記念モニュメントなどを見ることができる。彼女の死から約 370 年後、ドイツの詩人フリードリッヒ・シラー (Friedrich Schiller 1759-1805) はこの乙女を取り上げ、1801 年 4 月 16 日この戯曲を『オルレアンの乙女』(Die Jungfrau von Orleans) と題して完成させた。これ以前でも、この乙女は彼女の生まれ故郷ドンレミ村ではなく、オルレアンという市の名を冠して呼ばれてきたが、それはそれまで連戦連敗を続けていたフランス軍がそれを逆転させ、イギリス軍を追い出し、祖国統一という歴史的偉業に踏み出す端緒の戦いがその市であったことによる。これを示すように、ヴォルテール (Voltaire 1694-1778) はシラーに先行して、この自分の同国人を描いた叙事詩に『オルレアンの乙女』(La pucelle d'Orleans 1762) と題していた。この作品はシラーが住んでいたヴァイマルでも有名になっており、彼がその乙女を素材に戯曲化しようとしているという噂が立つと、カー

ル・アウグスト (Karl August 1757-1828) 大公は驚いて、「劇作する前に自分に、または劇に通じた他の者にその材料を見せるようにと、シラーにしばしば強く要請した」³ ほどのものであった。

ここでは先ずこのヴォルテールの作品との関係から始め、歴史上の百年戦争をシラーはどのように戯曲化したか、すなわち「魔女」か「聖女」かという宗教問題、王位継承権の争い、民族国家の形成という問題を、どのように主人公ジャンという乙女の悲劇に融合したかを見て行きたい。

ヴォルテールとシラーの「乙女」の意味

シラーがヒューム (D. Hume 1711-76) の『英国史』、そしてフランス語で書かれた数冊の関係本などを読み、この作品の準備をしていたことは知られている⁴。さらにアンニ・グートマン (Anni Gutmann) は、ヴォルテールのその叙事詩がシラーのこの戯曲に影響を及ぼしていることを指摘している⁵。それゆえこの両者の相違を浮かび上がらせることによって、シラーが自分の悲劇にこめた理念をより明らかにできよう。先ずヴォルテールの概略から始めることにするが、混乱を避けるため、人名などはシラーの表記法に統一することをここで断わっておきたい。例えば、フランス語ではシャルル (Charles)、ジャン (Jeanne) であるが、ドイツ語ではカール (Karl)、ヨハンナ (Johanna) となり、この後者に統一したい。では、始めよう。

シャンパーニュの州境にある無名だった寒村ドンレミが、百合を紋章とするフランスの王家と民族に栄誉の冠を授けることになる救国者、ヨハンナを生み出した。こうヴォルテールは歌い出し、王家と民族が主題であることを明らかにしている。ところが、「その村の司祭はたいへん信心深く、祈祷でも、食卓でも、ベッドでも、神に新しい仕え方をされていて、この彼がヨハンナを創ったのだ」⁶ と続け、「この彼は特に酒場の一番びちびちした女の子を選んで、この世に美人を生み出していた」となると、これはフランス革命前のカトリック僧の墮落に対する批判をこめているのであろうが、ヴァイマル大公がシラーに注意を促そうとした動機は十分察せられよう。さらに、この美しい娘たちはイギリス人の凌辱の対象になる運命にあったと続き、女性たちの戦時下の厳しい状況が侵略者への非難をこめて歌われる。16歳になるとヨハンナはヴォークレールで「馬」の世話係になり、町中の評判になった。彼女の外見は立派で、たち振る舞いはとてもしとやかで、黒いぱっちり目は輝き、まっ白な歯は均整がとれ、身体は食べてしまいたくなるような魅力に溢れ、日焼けした胸は誇らしげに膨らみ、タラール (法衣) をまとった裁判官であれ、兜をかぶった兵士であれ、さらに僧衣に身を包んだ司祭様さえ誘惑されてしまいそうな、そんな魅力がほとばしり出ていた。つまり、彼女は動物のような男たちが通う飲み屋の給仕女になったのだ。彼女は大きなポットを手に店中を歩き回り、町民や貴族にも、そして盗人の団体様までにも、ぶどう酒を注いで回り、その際にびんたを食らわせて、厚かましくもお尻などに伸びて来る動物的な手から逃れる術を心得るようになった。彼女は朝早くから夜遅くまで働き、よく笑っているうちに、この「馬」の手綱を取って、ゆっくり引き寄せ、たてがみにブラシをかけ、傷口に

膏薬を貼ってやるとか、またはローマの兵士のように馬乗りになって脇腹に拍車をかけ駆り立て、乗りこなしてみたいと思うようになった。

めったにお目にかかれない、このような宝を多くの宮殿などから遠く離れた、低級な酒場に導いたのは神のごとく深き知恵を持ったディオニューズ (Dionys) であった。「宝」(Schatz) はもちろん恋人などと呼ぶ時の「大切な人」の意で、ここではヨハンナを指しているが、問題はディオニューズである。この固有名詞<Dionys>は元来ディオニュージウス<Dionysius>という古代ギリシアに由来する男性名で、「ディオニューソス<Dionysos>神に捧げられた者」という意味がある。中世にこの名前が好んで付けられ広まったが、これには3世紀の聖人ディオニューズス崇拝が影響している。この聖人はパリの初代司教で、カトリックでは「14 救難聖人」(Nothelfer) の一人とされ、伝説では、首を刎ねられた彼はそれを手に持って、彼の名にちなんだ^{サン}聖デニ (Saint Denis) 教会に歩いて戻ったという。この教会はパリから北に 10km のセーヌ川沿いにある同名の市に建ち、カーロリング、カーペティンガ王朝がこれを厚遇し、その歴代の王墓がここにある。この教会の名<Denis>はあの聖<Dionysius>の短縮形である。それゆえヴォルテールの聖人ディオニューズはこの古くからフランス王家を守る聖ディオニューズスで、その彼が百年戦争の末期に出てきて、この乙女にテコ入れをして、この国を守ろうというのであろう。シラーの作品でも、この教会名がカール太子の将官ラ・イールの台詞を通して第 1 幕第 5 場に出てくる。太子の実の母である女王イザボ (Isabeau) が、ブルグンド (Burgund) 公と共にイギリスと同盟し、まだ子どものイギリス国王ハインリッヒ 6 世 (Heinrich . 在位 1422-61, 英名 Henry) を戴冠させ、その子の手を取ってフランス王の王座に就かせる所、それがその聖デニ教会である。ヴォルテールでは乙女を導き、フランスの歴史的災難を救う聖人として出てくるが、シラーでは逆に侵略者イギリス王の戴冠式を催す教会にされ、そこで重要な役割を演ずるのが太子の実の母にされている。すなわちフランスは分裂し、実の母と子が敵対している、そうシラーは舞台設定している。

この聖人の名前でもう一つ見逃せないことがある。先述したように、これは古代ギリシアのディオニューソスに由来するのであって、ローマ神話がそれをバッカス (Bacchus) という名で受け継ぐが、どちらも酒神である。この点を考慮すると、ヴォルテールがその「酒の神」に由来する名の聖人にヨハンナを先ず場末の酒場に導かせ、ぶどう酒を客に注ぎ、獣のような男をあしらう術を身につけさせたのも頷けよう。シラーの悲劇でその役を担うのは太子の母親イザボである。彼女は戦場でも男漁りをし、そのため第 2 幕第 2 場でイギリス軍から厄介ものにされている。ヴォルテールが先ず乙女ヨハンナに与えた役を、シラーは母親イザボに割り振ったと言えよう。しかし、それはヴォルテールほどどぎつなく、彼女とイギリスの将官たちとの同盟に不和を来たす種としてそっと挿入している。

ヴォルテールのヨハンナはそんな酒場で働いているうちに、サタンによって陥落させられる寸前になる。このサタンはイギリスのグリスブルドンという名の乞食坊主で、宣教を口八丁でこなし、告解の椅子から覗き見やスパイもするという比類のない輩で、エジプト、ヘブライ、ギリシ

アの魔術にも通じたサタンで、カバラ (Kabbala) によってヨハンナがイギリスを脅かす危険人物と知り、祖国イギリスのために「この娘の腰紐を解いて、無害にしてやろう」と誓いを立てたのであった。カバラはユダヤ教の神秘思想で、これは主イエズスを死に追いやったユダヤ人のもので、このサタン坊主は異教も魔術も何でも利用できるものは使い、とにかくヨハンナが彼の祖国に害を及ぼさないように、彼女を愛欲の道に引きずり込んでしまおうとしたのである。ところが何と、彼の知らないうちに、無学の間抜けがこの乙女の前に現れ、あらゆる機会を利用して彼女に言い寄るので、彼女の内なる種火が外に向かって燃え上がるのをかろうじて抑えているのは、ただ羞恥心だけという状況になってきた。つまり強力なライバルの出現である。彼はその間抜けな男を、「二人で仲良く彼女をものにしよう」と言いくるめ、魔法の本を手にして、モルフォイス (Morpheus, ギリシア神話の「夢の神」という名の霊を呼び出すと、この神は二羽の梟が引く荷車に乗り、空中を滑るように夜の闇を蹴散らし、サタンのいる所を目指してやって来て、眠っているヨハンナにかがみ込み、露になっている彼女の乳房に麻酔効果のあるケシの液を垂らしたので、彼女は深い眠りに落ちて行った。

それで僧サタンと無学の間抜け男、すなわち二人の恋のライバルは透かさずベッドカバーを引きずり下ろし、露わになった乙女の美しい裸体の上にさいころを転がし、どちらが先に初夜権 (jus primae noctis) を行使するかを決めるのだが、もちろん魔術によりイギリス僧サタンの方にそれが転がり込んできた。そのとき何と、驚くべきことに、ディオニュース^{ウツワ}がその間に割って入って来たのだ。あの聖人がフランスの危機を救いに来たのである。二人のライバルはガタガタ震えだし、仰天して尻もちをつき、あっという間にずらってしまったが、ヨハンナの方は目覚めて、自分の純潔が汚される所であったことに気づいて、恐れおののいていた。その彼女にディオニュースは近づき、慰め、こう元気づけた。「お前は天が選ばれた、高貴な者 (Gefäß) だ。神はフランスをとて愛しておられるが、その国の抑圧者どもには腹を立てておられる。その輩の上に神の怒りを滝のように打ち注ぐ器にお前はなるのだ。乙女よ、立て、わしについて来い。お前の下等な性 (Wesen) は捨てる。これより先、お前の名は歴史の英雄の列に連なるのだ」。

この言葉を聞き、次第にこの酒場女の心に戦士の魂が燃え上がってきた。そしてディオニュースに連れられて、教会に足を踏み入れるや否や、雲間から立派な甲冑が、さらに続いてデボーラ (Deborah) の兜、ダーフィット (David) の投石機、ジムゾン (Simson) の骨、そして最後にユードイト (Judith) の剣が彼女の前に降って来た。この固有名詞は『旧約聖書』に出てくる名で、神とイスラエルのために戦った予言者や英雄である。旧約時代の英雄たちの用いた武器が、新約の中世に生きるヨハンナの前に天から降ってきたわけである。シラーの戯曲では、兜と剣だけがそれぞれ異なった方法でヨハンナの手に渡るが、これについては後述に回すとして、ジムゾンの名は、イギリス側に捕縛され、神に助けを乞うヨハンナの口を通して出てくるので、ここで旧約のその箇所を見てみよう。この彼に関する記述は「判事の書」の第 13-16 章にあり、彼はイスラエルを支配していたペリシテ人に反抗したので何回も捕縛されるが、そのつどユダヤ民族の神は彼に力を与え、救う。その一つがヴォルテールの利用した「骨」の件である。ジムゾンは二本の

新しい綱で縛られていたが、主の霊が下り、彼の腕を縛っていた綱は火で焼かれた麻糸のようになり、解け落ち、彼は自由になった手で、落ちていた口バの下顎を拾い上げ、1000の人員をそれで撲殺してしまうと、その顎は捨ててしまった⁷。これが骨だけになり、紀元後の1430年頃ヨハンナのもとに、ヴォルテールによって、届けられたわけである。次にまた彼は捕縛されてしまうが、今回は綱によってではなく金属製の枷をはめられ、眼球をえぐり取られ、牢の中で口バのように臼を挽かされている。ペリシテ人は彼らの神に捧げるお祭りのため神殿に集まり、彼を慰みものにしようと、牢から引き出す。引き出された彼は神殿を支えている二本の大きな柱に両手を当て、「神なる主よ、私のことを思い出し、今回も私を強くしたまえ、ペリシテ人に復讐をするために、私の両目の復讐のために」と言いながら、その両柱をしっかりと掴み、グイと持ち上げ、「我が魂はこのペリシテ人と共に死すのだ」と叫び、そこに集まっていた3000もの敵と共に、崩れ落ちてきた神殿の下敷きになって亡くなった。シラーのヨハンナは鉄の鎖で三重に縛られ、塔に閉じ込められている時、この彼を引き合いに出して、神にこう祈った。

あなたは全能ですので、この鎖を細い蜘蛛の糸に
 変えることなど簡単におできになれますわ
 あなたが望めば、この鎖は解け落ち、 3470
 この塔の壁も裂けてしまいますわ あなたがジムゾンを
 お助けになりましたのは、盲目の彼が枷をはめられ、
 高慢な敵の侮りにじっと耐え忍んでいた
 その時でした。 あなたを信じて、
 彼は牢の柱をしっかりと掴み、 3475
 身をぐっと傾け、その建物を倒壊させました

シラーは明らかにヴォルテールを意識し、そして判事ジムゾンの二回の捕縛を応用している。旧約の英雄は牢ではなく、異教の神殿を倒壊させ、多くの敵を巻き添えに死ぬが、シラーの乙女は鎖を引きちぎって、戦場のフランス国王を救出しようと、敵の中に切り込んで行く。そしてどのような結果になったのかについては後に回すことにして、ヴォルテールの続きに戻る。

ヴォルテールの乙女は旧約の英雄たちの武具をまとうと、胸の内で名誉欲がふつふつと湧きだし、彼女が馬を呼ぶと、何と、美しく可愛い口バが緑野を駆けてやって来た。馬を呼んだのに、やって来たのは小さな口バとは、どうも博識の啓蒙主義者ヴォルテールは『ドン・キホーテ』の作者セルバンテスに倣って、当時の魔女・聖女伝説をここでも徹底的にパロディ化しているようだ。とにかく、乙女はその駄馬にまたがり、聖人ディオニュースは光に乗り、太子のもとへ急ぐのだが、トゥール (Tours) に向かうには、途中イギリスの陣営を抜けなければならない。ここでは高慢なイギリス人たちがフランス・ワインをたらふく飲んで、深い酩酊状態でぐっすり寝込んでいた。聖人はヨハンナに、「これは皆殺し (Massenmord) に打って付けた」と勧めたが、

高貴な心の乙女はそのような下劣な行為ではなく、他のもっと小気味の悪い悪戯を思いついた。少し離れた所に張られたテントの中を覗いて見ると、豪傑で知れ渡っていたシャンドス(Chandos) 大将が若い小姓の横で寝ていた。彼女はインクを指先に付け、白い尻を上に向けて眠っている若造のそこにフランス王家の三本の百合を描き、側の英雄さんからは剣を取り上げ、パンツ(Hose)を脱がせて、ずらかった。朝になり、目覚めた大将はその狼藉を目のあたりにし、「これは悪魔の仕業に違いない」と怒り狂い、剣もパンツもなしで、その犯人追跡に取り掛かるのだった。ヴォルテールはイギリス陣営の杯盤狼籍ぶりと男色に対する乙女の悪戯、さらにやられた方の反応をコミカルに描いている。イギリス側が宗教裁判で彼女を裁いたとき、「彼女は魔女である」と主張したのだが、フランスの啓蒙家はそういう説の出所をこのように描き、笑い飛ばしているのであろうか。シラーもその魔女説の出所を同様に最初はイギリス側にしているが、後に乙女自身に迷いが生じ、フランス側にも彼女はそうではないかという疑惑が生まれるという筋立てにしている。それについては後述することにして、ここで注意すべきことは、シラーはヴォルテールと逆のことを乙女に先ずやらせていることである。すなわちこのようなエロチックな「悪戯」をではなく、聖人が勧め、高貴な乙女が拒否した皆殺しの虐殺の方をヨハンナに果たさせるのであって、その様子を第1幕第9場で騎士ラウールにこう報告させている。

それは戦いなどと呼べるものではなく、まさに屠殺でした。 981

人間相手の「戦い」(Schlacht)ではなく、抵抗手段を持たない動物を「屠殺」(Schlachten)するようなもので、このような超人的な力を持っているのは魔女に違いないとイギリス側は恐れることになるが、フランス側は逆に神の救いではないかと喜び、ヨハンナを迎え入れるのである。ここでは、ヴォルテールに戻ろう。

そして、聖人ディオニュースと乙女ヨハンナは国王の城に着く。ここで聖人は、勇敢な兵士で、良きカトリック教徒、そして優れた雄弁家というロジェ・ボドリクール(Roger Beaudricourt)⁸に姿を変え、王に向かって、「これはまた何ということだ、王が愛の奴隷とは。あなたの腕はまだなまっただままで、残忍な敵がフランスの王座にすわって威張っているというのに、恥ずかしく思わないのか。起きて、武具をつけられよ。この勇ましい乙女に従って、王位を取り戻されよ」と、熱弁を振るって説得すると、愛で占められていたこの支配者の心に名誉心が沸き立ってきた。しかし同時に、「ひょっとしたら、この乙女は悪魔の使いではないか」という疑念も湧き、どんな女の子も顔を赤らめてしまうに違いない質問をした。「お前は本当に処女(Jungfrau)なのか」、「はい、偉大なる王さま。私はまだそうでございます。あなたの御典医、大奥の老女、聖職者それに学校のうるさ方に、私の女としての機密を検査するよう命じて下さいませ」。

この節度ある賢明な答えを聞くと、王は「この乙女は本当に神の靈感を受けている」と信じるようになり、さらに「昨夜わしが美しい女に何をしたか言ってみよ」と訊ねた。乙女はびっくりしながらも、「何もなさいませんでした」と答えると、王は跪いて、大声で「奇跡が本当に起こっ

た」と、十字を切りながら叫んだ。その間に先ほど呼ばれた者たちがヒッポクラテスの本を手
にやって来て、ぴんと張った乳房の精密検査から始め、(中略) 彼女はすべての検査を受け入れ、
合格した。それが済むと彼女は王の御前に戻り、途中で奪って来たあのイギリス大将のパンツを
王に差し出し、「私の腕力と純潔にかけて、あなたはランスで聖香油を注がれ、イギリス軍をオル
レアン市から駆逐されることを請け負います。さあ、私について来て、神があなたに選ばれた使
命を果たしなさいませ」と言うと、城中の者は全員拍手喝采で、城門を開け、出陣して行くカー
ル太子の胸には大勝利の予感で一杯になり、愛人アグネス (Agnes) のことなどすっかり忘れ、
残されたこの女の方は朝のまどろみの中で彼を抱擁している夢に浸っているのであった。聖人ディオ
ニュースは乙女に敵のタルボット (Talbot) を亡き者にすることを命じ、今後ずっと勇気
(Mut) と貞操 (Tugend) を保つことを誓わせ、再び天に昇って行った。

以上がヴォルテールの叙事詩の概略である。彼はジャン・ダルクを魔女と決めつけた非科学的
な宗教裁判に対して、彼女の「無実」(Unschuld) を「処女」(Unschuld) であることにすり替
え、面白可笑しくパロディ化していると言えよう。しかし彼は侵略者イギリスに対しては完全な
ナショナリストで、この不道德なサタンの輩に「性女」にされかかった乙女を聖人ディオニュー
スの命に従う「聖女」、そして勇気ある「戦女」として歴史の中に名を刻ませようとしている。
そしてカル太子にはアグネスのアムールと決別させ、出陣させるが、シラーは愛と戦いを矛盾
するものとして敵対させず、太子には愛人ソレルへの愛のためにも戦いを決意し、乙女ヨハンナ
に王軍の指揮を委ねている。

フランスとドイツという言語の違い、そして叙事詩と戯曲というジャンルの相違はあるが、ヴォ
ルテールと同じ『オルレアンの乙女』というタイトルをつけたこの作品に、シラーは「ロマン的
悲劇」(eine romantische Tragödie) と副題を付けて、この>Unschuld<そして民族の問題をど
う扱っているのだろうか。

歴史と文学作品の関係

この作品完成の4年後シラーはこの世を去るのだが、その後歴史はフランスとの戦争と1871
年のドイツ統一へと進み、それに合わせてこの戯曲も民族主義的に解釈される傾向が次第に高ま
り、ナチスの支配下で最高潮に達した。そして同じ民族主義でも、世界大戦後の植民地では列強
異民族による支配を駆逐しようとする独立運動を励ますものとしてこの作品は受け入れられた。
ヘルムート・ブランド (Helmut Brandt) はこれについて、「『オルレアンの乙女』は国民的歴
史的事件における外国の抑圧者に抗した民族戦争を表しているのですが、その国民は当時ドイツ
を最も脅かす隣人でしたし、次の世代ではもう不倶戴天の敵(となりました)⁹と、その作品で
扱われているのは確かに民族解放戦争であるが、しかし「これは人類の利益には反して行われる
べきものではなく、国民の正当な利益に役立つ時のみ、そして人間らしい目標を実現する過程に
ある時のみ、その戦争を肯定する」¹⁰、これがその詩人の世界市民的立場であると書いている。シ

ラーの歴史的立場としては勿論そうであり、彼のこの意見には頷けよう。では、どのような世界市民なのか？

歴史上のヨハンナは1430年5月23日イギリスとブルグントの同盟軍に捕えられ、宗教裁判で火刑に処せられるが、シラーのヨハンナはイギリス側だけに捕えられるのであって、この時ブルグント公は既にフランス太子と和解している。それゆえイギリス側から言えば彼は「裏切り者」(3426)となっている。彼はこの彼女を救出しようとフランス国王と共に出陣し、捕縛され塔に捕らわれていた彼女はその戦いの最中に脱出し、劣勢になっていたフランス軍の国王を救い出すが、彼女の方は戦死する。それゆえ宗教裁判の被告人はいないので、その開廷も火刑も不可能となる。これはまさに歴史の改竄で、しかも次のような二つもの改変であるが、これらはシラーの手にかかると文学的な美しい改作となる。その改変の一つはブルグント公の「改心」(1805ff.)である。これより「フランス人の血が流されなく」(1719)なり、ヴォルテール流のイギリスは悪魔でフランス側に聖人ディオニュースとその命を受けた乙女が付いているという完全な民族主義とは異なった趣を呈し、後に詳述するように、私欲・私怨による王位継承戦争から民族(解放)闘争へと流動するテーマが提示されることになる。もう一つは、ヨハンナは「魔女か、聖女か？」という問題で、このテーマが狭い法廷から解放され、全景で全登場人物によって問題にされることになる。

この後者のテーマは登場人物の台詞が始まる前に、「ある田舎。右側に聖人像を安置した礼拝堂、左手に高い榿の木」というト書きで既に、暗示されている。この聖人像はヴォルテールのフランスの聖人ディオニュースとは違い、ユダヤ民族の宗教から独立し、人類一般を救おうとしたキリスト教のイエズスを産んだマリーアである。ところがその向かいにある榿は、キリスト教伝道以前のケルト族祭司ドゥルイーデの名を付けて村人に呼ばれていた木(Druidenbaum, 98)で、そこには幽霊や魔物が出ると、村の古老たちに恐れられている。そういう舞台設定で前場の幕が開き、ヨハンナの父親ティボ・ダルクの台詞が始まる。

さて、お隣のお三方、今日のところ私たちはまだフランス人で、
自由な民で、祖先たちが鋤で耕してきた
昔ながらの土地の主人だが、明日になれば
私らに誰が命令してくるか、これは誰にも分かりません。
と言うのも、イギリス人があっちでも、こっちでも
勝利の旗をはためかせ、フランスの沃野を
馬で踏み荒らしているんですからな。
パリは早くもイギリスを勝利者として迎え入れ、
ダーゴベルトの昔からの王冠で、
他国一族の坊やを飾るということだ。
私らが王家のお子さんは相続権を奪われて、

5

自分の国なのに、あちこち逃げ回らねばならん、
 そしてこの彼に対して、敵軍と組んで戦っておるのが
 彼と同じ血筋の従兄で、彼に最も仕えるべき上級貴族、
 さらにその軍を率いているのが何と、冷酷な実の母親だとは。 15

たったの 15 詩行でフランスの国情と、この戯曲の重要な要素を見事に表している。この舞台は仏英間の百年戦争（1337-1453）という状況下のフランスで、ここでの争点の一つは経済的なものとしてフランドル地方の羊毛産業の利益を巡るものとイギリス領の帰属問題で、もう一つは両国王家の相続争いであるが、ティボの台詞が示唆しているように、シラーはその後者の側面に絞って戯曲の筋を進めようとしている。この相続争いの発端はフランス・カペ朝の直系の断絶にある。その王位を継いだのは傍系 2 代目のフィリップ 6 世（Philipp . 1293-1350, 王位 1328-50）で、彼がヴァルワ（Valois）朝の創始者になる。この彼にイギリス国王エドワード 3 世（Edward . 王位 1327-77）が王位継承権を主張したことからこの戦争は始まるのだが、このイギリス国王は彼の父エドワード 2 世（Edward . 王位 1307-27）がフランス・カペ朝の国王フィリップ 4 世（Philippe . 王位 1285-1314）の娘イザベラ（Isabella）と結婚し、その息子が彼であったからである。そういう観点から見れば、この戦争は葬儀後に血族間の相続争いから起きたものなのだが、その原因は政治的な思惑から、そして身分に相応しい相手を選んだ末の王族間の国際結婚にあったと言えよう。つまり、これは王家の親戚同士、つまり同じ血筋同士の争いである。

この争いはシラーの乙女ヨハンナが年頃になった頃も断続的に続いていたが、その歴史の主人公は替わり、イギリス王はハインリッヒ 6 世（Heinrich . 1421-1471, 王位 1422-61, 英名 Henry）で、フランスではカール 7 世（Karl . 1403-61, 王位 1422-61）であった。その後者はヴァルワ朝 5 代目の正式な王になるはずであったが、戴冠式も挙げられず、ティボの台詞にあるように、首都であるパリの市民にも国王として認められず、ブルグント（Burgund）地方を治める最も近い血筋の公爵フィリップ（Philipp 在位 1419-67）にも、さらに実の母である皇太后イザボにもイギリス側に付かれ、敵対されていた。このティボの台詞で興味深いのは「ダーゴベルトの昔からの王冠」である。このダーゴベルト（Dagobert 605/10-39, 王位 629-39）は全フランク王国を自ら治めたメロヴィンガ朝最後の国王の名前で、その宰相ピピーン（Pippin 714-768）が次のカーロリング朝を開くことになる。つまり血筋による王朝はメロヴィンガからカーロリングに、そしてここでもカペからヴァルワへと変わっているが、シラーはこの農民に支配階級の「私家の血」という小異に捕らわれず、「これまでの国王はダーゴベルトからずっと、イギリス人とは違うフランス人の血で受け継がれてきた」という民族主義的な観念で考えさせている。そして第 2 幕第 10 場のヨハンナの「フランス人の血は流させてはいけません」（1719）という台詞も同じ観点から発せられている。

この民族主義的意識を中世ヨーロッパに作りだした一つがこの百年戦争であったと言えよう。

ジャン・ダルクの宗教裁判そのものがローマ・カトリック (katholisch, 「普遍的」の意) 体制が各民族の特殊性顕在化により崩壊しつつある時期に行われている。それゆえこの裁判はローマの教皇とは関係なく行われ、イギリスの政治的影響の濃いものであった。既にこれ以前には教皇の「アヴィニオン捕囚」(Babylonisches Exil 1309-77) とシスマ (Schisma 1378-1417) があり、これも「普遍的キリスト教」支配の終焉を示すものであった。歴史上の乙女ジャンは「主よ、来たれ」(Veni, Creator) と歌いながらオルレアンを解放し、彼女の旗には「イエズス・マリア」(JHESUS MARIA) と書かれていたが、これらは「フランス側に神は付いているのであって、イギリス側にはない」という民族主義的意識を表している。それゆえイギリス側も同じ理由で、「ジャンは魔女であり、こちらの神が本物だ」ということを、宗教裁判を使って、アピールしなければならなかった。

歴史上のイザボの所業はこの民族主義の対極にあった。ティボの台詞にある彼女はひどい母親というイメージしか与えず、太子と血縁にあるブルグント公の振る舞いも異様に思われる。それ故その背景となっている歴史的事実を押さえ、さらにシラーによるその変更を知ることこの戯曲の理解に役立つと思われるので、前述した百年戦争の発端に続く歴史から始めよう。

フランス・ヴァルワ朝ではあの創始者に続いてヨハン2世 (Johann . 王位 1350-64), カール5世 (Karl . 1338-1380, 王位 1364-80), カール6世 (Karl . 1368-1422, 王位 1380-1422) にと、イギリスではあのエドワード3世に続いて、ハインリッヒ4世 (Heinrich . 王位 1399-1413), ハインリッヒ5世 (Heinrich . 1387-1422, 王位 1413-22) にと、代が替わっていた。これだけ代替わりして両王家間の血筋は薄くなっていたが、そのイギリス王はリチャード3世に倣って再びフランス王位を要求してきた。それはフランス国内に付け入る隙があったからである。

1380年カール5世が他界した時、その世継ぎの6世はまだ12歳であったため、その後見役として叔父のブルグント公フィリップ (Philipp) らがその摂政政治を私家に有利に行い、幼い王の領地を略奪などして、中心を失ったフランス国内の貴族はバラバラ状態になっていた。ようやくカールは成年に達し、自ら政治を行えるようになるが、1385年に結婚したバイエルン家出身のイザボは自由奔放な性格で、祝宴やパーティ好きで、そこでの色恋沙汰が噂に上るようになり、それに嫉妬したのであろうか、1392年王は精神異常を来たす。そのためこの王妃は摂政として親戚のオルレアン公やブルグント公と共に国政を執り仕切るが、彼女はひいきにしていたオルレアン公ルートヴィッヒ (Ludwig) と結び、あの贅沢で恋多き生活で国家財政を圧迫させ、その彼が1407年に殺されると、ブルグント公ヨハン (Johan) と結ぶという王妃であった。こういう状況で同じ血筋でありながら、又はあるが故か、オルレアンとブルグント両家は権力争いを始める。1403年には狂人の国王とその妃の間に息子カールが生まれ、これがこの戯曲ではドフェン (Dauphin, 「太子」の意) と呼ばれ、後に国王カール7世 (Karl . 1403-61, 王位 1422-61) となるのだが、このような状況での誕生であるため、母から見れば気遣い夫の息子、息子から見ればさらに本当に父の子かという恐怖疑惑に苛まれたとしても不思議はないであろう。百科辞典などでは、このカールが王位に就いたのは父の死の1422年とされているが、当時のこういう実

情、すなわち自分に正当な相続権があるかという自然な疑念、そして戴冠式を済ませていないということから、彼は実際ほとんど「ドフェン」と呼ばれていたのである。シラーもそれに倣って第1幕第10場で、この彼と初会見したヨハンナに「太子」(1023)と呼ばせている。さらに、パリ・サン・ドニ教会でイギリス国王ハインリッヒ6世がフランス王として戴冠される式典の様子、そして皇太后イザボの「フランス人ども、私に感謝すべきだよ、病気の幹に清い枝を接ぎ木するこの品種改良が、気違い親父の生まれ損ないの息子から、お前たちを守ってやるのだからね」(第1幕第4場、734ff.)という発言も、この事情を反映したシラー創作の台詞である。ここでついでに断っておきたいことは、劇中ではこの戴冠式がドフェンのランスでのそれより先に済まされているが、その歴史的順序は逆ということで、後者は1429年7月17日にカール7世となり、前者がパリでフランス王の冠を頭上に置いたのはその2年半後の1431年12月17日である。これは明らかにシラーによる歴史の改作であるが、これによりフランス側の窮状を極限化し、救国の乙女ヨハンナの登場をより鮮明にしていると言えよう。尚、マイヤーの百科事典によれば母イザボと太子との不和は、「その息子が彼女の不道德な生活を非難したため、激しい憎しみを抱くようになった」¹⁾とあるが、これはイザボの「あいつは子の分際で母の道德の裁判官をやっておった」(1404)という台詞で表されている。しかし既に示唆しておいたように、この彼女の性癖を劇中でリアルに批判する役はイギリスの軍人ライオネル、トルボトそしてブルグント側にシラーは移している。その第2幕第2場でイギリス側の陣営を訪れたイザボと彼ら軍人とのやり取りは、

イザボ 勝利をもたらす少女が敵軍を率いているなら、
私がお前たちを率いて、お前たちのために
乙女と女預言者の代わりをしてやろう。

ライオネル ご夫人、パリにお戻りを。私どもは優れた
武器で勝利をつかみたいが、女どもによってなど願ひ下げだ。 1380

トルボト お歸りを。あなたが陣営に来られて以来、何もかも
左前になり、私どもの武器はなまってしまった。

ブルグント お歸りを。あなた様がおられると、何も良いことはない。
兵士たちはあなたに眉をひそめているのですぞ。

(中略)

イザボ 私にも他の女のように恋情があり、熱い血も
流れておるわ。王妃としてこの国に来たのは 1440
生きるためで、らしくするためではないわ。

呪わしい運命が生きる喜びに溢れる若い私を
気違い夫に結び付けたからといって、
私に喜びを諦めるとも言うのか。

そんな生活より、自由 (Freiheit) の方が好きじゃ。 1445

このことで誰が私にお説教を垂れようと、　ところで
どうしてお前らと私の権利 (Rechte) で争わねばならんのか。

そういう「自由」と「権利」を主張する彼女は、「この男を私にくれ」とライオネルを指して、「お前は私の気晴らしの同伴にちょうど良い」(1454)と彼を所望し、選ばれた彼の方は、「きっと必ず、私どもがとっつかまえたフランスの少年を送って差し上げよう」(1457f.)と切り返し、イザボの方は怒って去って行く。何のために少年を捕まえて来たのかは、ヴォルテールが叙事詩で歌ったイギリス陣営の描写にあったものと同じであろう。シラーによって創作されたイザボは戦場にまで彼女流の「自由と権利」を振りまき、その彼女にこの詩人は乙女ヨハンナの「純粹・無垢」を対照化している。

歴史に戻るとして、前述したようにカール6世が亡くなる前のフランス国内はブルグントとオルレアン両家の権力闘争、そしてそれを治めるべき国王は精神病を患い、無力であった。これについてイギリス王ハインリッヒ5世は1415年にその王位を要求してきた。そして再び戦争が始まるのであるが、1417年イギリスに襲撃されたノルマンディ住民が国王に援助を求めると、国王軍の司令官となっていたダルマニャク (d'Armagnac) は「ブルグントとの戦いで忙しいから」と、内戦を理由にその救援要請を断る始末であった¹²。他方これに対抗するブルグント家の方はフランドル地方の毛織物業との利害関係から親英的で、既に1416年10月にはイギリスと同盟関係にあり、王妃イザボはこのブルグント公と結んでいた。そして首都パリで暴動が起き、このブルグント勢の支配に委ねられ、太子はそこから逃げ出さざるをえなくなる。1419年にはこのカール太子の友人ドゥ・シャテル (du Chatel) がマンテロ (Mentereau) の橋の上で、ブルグント家の代替わりで当主となっていたヨハン公 (Johann) を殺すという事件も起こる。その亡父の跡を継ぐのがフィリップで、この新しいブルグント公とドゥ・シャテルの私怨関係を、シラーはここで利用し、太子側のフランスとブルグントの内戦理由の一つとしているが、歴史的には支配階級間の権力闘争である。百年戦争の経済的理由は先述したとおりであるが、フランス軍の連敗につぐ連敗の原因として、フランス貴族の古風な馬と槍を中心とした騎兵戦術に対して、イギリス軍は弓矢を利用するという近代的戦術で対抗した。そのためフランスの騎士がいくら勇敢でも、飛んでくる矢的になるだけで、例えば1415年のアゼンクール (Azincourt) の戦いは中世戦史上で最も凄惨な流血状況を呈し、フランス側は1万の戦死者という結果で大敗した。これは戦術の相違であるが、フランス側の抱えていた決定的弱点は各貴族まとまりのなさで、つまり私家の勢力を拡大しようという相互の争いで、その象徴的なものがオルレアンとブルグント両家の権力争いである。

この戦争は1420年のトゥロワ (Troyes) 条約で一時的に収まるが、その内容は領土の分割はもちろんの事として、さらに王家の娘カタリーナ (Katharina) は戦勝国の英王ハインリッヒ4世と(人質として?)結婚し、その彼をフランスの摂政 (Regent) として任命するというもので、これは王妃イザボが精神病の夫カール6世に強要したものであった。彼女にはどうも国民と

が民族などという感覚は微塵もなく、両王家を自分の血筋で結び、勢力を伸ばそうとしていたのであろうか。パリから追放された太子はセーネとルワール両河の間を転戦し続けるしかなく、他の貴族・領主も同様で、自分の力が及ぶ限りが領地と言える状態で、つまりその条約でフランス全体がイギリスになびくことにはならなかった。その2年後の1422年、まずイギリス国王ハインリッヒ5世が、その2ヶ月後に精神を病んでいたカール6世が亡くなり、前者の息子はハインリッヒ6世として英国王になったが、何分まだ生後10カ月という若さのため、あの条約に従ってパリで摂政役を務めていたのはイギリス人ベッドフォード公爵¹³で、それと同盟しているフランス方が皇太后イザボとブルグント公である。そして普通なら父王を継いでカール7世になるはずの彼は相変わらず「ドフェン」と呼ばれ、両河の間をさまよっている状態である。これが農民ティボの15詩行の台詞の史的内容である。

この項を終えるに当たって付け足しておきたいことは、歴史的イザボは「夫カール6世が1422年に他界すると政治的影響力を失い、1435年この世を去る。そして、イギリス王ハインリッヒ6世(1421-61, 王位22-61)は、先王ハインリッヒ5世とフランス王家から来た王妃カタリーナ、すなわち1420年のトゥロワ条約によりイザボとカール6世の娘との間に生まれた子である」¹⁴。それゆえ乙女ヨハンナが歴史上に登場した1429年の百年戦争では、26歳のフランス太子カールは自分の妹カタリーナの子である弱冠7、8歳の子どもであるイギリス国王と戦っているということで、これも親戚同士の王位継承戦争となる。しかしシラーはこの件に関して劇中では暗示させず、もっぱらイギリスを異民族としてのみ扱い、両王家の血族関係には触れていない。

これまでのことを簡潔にまとめておこう。ヴォルテールでは乙女の>Unschuld<(純潔)を巡る、動物のような男たちとサタンであるイギリスとの奪い合いから、聖人ディオニュースが彼女を救い、その女としての「性」から脱し「聖」なる任務に就くよう導いていた。その前者にのめり込み、貴族的社交界で気ままに楽しみ、民族も人民のことなど考えもしない歴史上のイザボがいた。シラーではそれを自分の「権利」として「自由」に行行使し、イギリスと同盟して自分の息子であるフランス太子と対立している母イザボが登場する。そしてこの王家に最も近いオルレアンとブルグントという両貴族家の親戚同士の争いを利用してイギリスが介入していた、これがシラーの組み立てた歴史的構図で、そこで乙女ヨハンナの>Unschuld<の帰趨が展開されることになる。

神の声、第一の3種の神器

父親ティボ・ダルクは戦禍が自分たちの村ドンレミにも及ぶことを察し、娘たちを「こんな時勢で嵐からしっかりと守ってくれる家となるのは、勇敢な男の誠実な心だけだ」(33f.)と決心し、三人の若者との結婚を決めようとしている。二人の娘はそれを喜ぶが、ヨハンナだけは一風変わっていて、父が見つめてきた花婿候補に見向きもしない。彼女は夜に家を出て、「十字路(Kreuzweg)を通過して歩いて行って、山の風と密やかに話をする」(88f.)のが、古老たちが恐

れる榿の大木の下で、そして「昼間には羊の群れを追って、いつもやって来るのも」(91) この木の所である、それを彼女の父親は心配している。彼女の相手に選ばれたライモントはその木の向かいにある礼拝堂を指して、「慈悲深い像の至福に満ちている近くで、そこから漂う天の平安に浸っているんですよ、あなたの娘さんはサタンによってここに誘われているのではありませんよ」(109ff.)とヨハンナをかばうが、父親の方は娘が「ランスで王座に座り、父のわしも、あれの二人の姉、国王までもがあれの前でひれ伏している」(Vgl. 115ff.) 夢を何度も見て、「あいつは胸の内で罪深い高慢を育てているのだ」(130)と考えているようだ。果たして、父親のティボと婚約者のライモント、どちらの意見が正しいのか。

この二人の会話はヨハンナの耳に入っているのか、入って来ても聞いていなかったのか、とにかくその場に彼女の台詞はない。その三人の所に、町に出かけていたベルトラントが兜を手に戻って来て、第3場となる。農夫に相応しくない物を手にしているので不思議がると、彼は町なかで色黒のボヘミア女が「兄さん、あんた兜を探しているんだろ」(173)と話しかけて来て、それを押し付けると、知らない間に人ごみの中に姿を消していたという話をする、突然ヨハンナはそれにパッと手を伸ばし、「私にこの兜ちょうだい」(191)と言い、自分のものにしてしまう。自由奔放な生活で知られていたボヘミア人は、キリスト教徒から見れば、あの榿の木と同じ異教的存在であることにヨハンナは気づいていないようだ。

さて、ベルトラントが町から持ち帰った戦況報告は、ブルグントとイギリス勢はオルレ안의町を完全包囲し、王妃イザボは「鉄の鎧をまとい、陣営を馬でかけ回り、毒気のある言葉で民兵(Völker)どもの怒りを、胎内で育んだご自分の息子に向けるよう煽りたてている」(240ff.)、イギリスのライオネルとトルボトは厚かましくも「女はみんな凌辱の捧げ物に、刀をふるう奴は刀の餌食にしてやると豪語」(252f.)している、これに対抗するフランス「国王はシノン(Chinon)で城を守っているのが精々で、兵力不足で戦場では持ちこたえられず」(273f.)という状況下で、「一人の騎士がわずかな兵をかき集めて、16旗をなびかせ、王様のもとへと向かっているだけ」(284ff.)という物理的現実で、既にオルレ안의運命は明らかである。皆はこの現実を受け入れ、ブルグント公と太子との嘆かわしい対立には、「いつかブルグントとフランスが仲直りしてくれれば」(301)と夢見るだけで、諦めている。こういう戦況を傍で聞いていた乙女ヨハンナはあの兜をかぶって、激しい勢いで、

(降服) 条約なんて駄目よ、町の引き渡しなんてとんでもないわ。
 救い主が戦いの用意をして、近づいているわ、
 オルレアンの前まで来た敵の武運を、そこで終わらせようかね、
 敵の幸運は頂点に至り、もう刈り取られる時期となっているの。 305
 罐をたずさえ、乙女がやって来て、
 その高慢の種から出た芽を刈り倒すでしょう、
 星まで高く掲げられた敵の名声を

天から乙女は引きずりおろすのよ.

弱気になっては駄目よ, 逃げてはいけないわ.

310

寒村の少女が突然このような預言者のような話をし出したのに皆びっくりし, ベルトラントは「奇跡はもう起こりはしない」(314)と, 父は「何か霊が娘っこに憑いたのか」と「あきれ果てる」(328)が, ヨハンナはさらに続けて,

私たちはもう自分たちの王様を, この国生え抜きの
ご主人を持ってはいけないの.

345

決して絶えることのない王家をこの世から消しては
いけないわ 聖なる鋤を保護して下さり,

牧草地を守って, 土地を肥沃にして,

農奴を解放し, 自由な身に導いても下さり,

王座の周りに栄えある町々を建設して

350

王様は弱き者に味方し, 悪しき者を恐れさせますの.

最も偉大なお方ですので, 嫉みなんてご存じなく, 一人の

人間であられるのに, 敵意に満ちた (feindselig) この地上で

慈悲の天使でもあられるのですわ だって,

金色に輝く王様の御座は寄る辺なき人々を

355

庇護して下さるの, そこには力 (Macht) と

慈悲が宿り, 罪ある人は恐れおののき,

正しき人は安んじて近づけますの,

そして王座の周りでライオンと戯れるのよ.

よそ者の国王は外からやって来るんだもの,

360

ご先祖は一人も聖なる遺骨となってこの国に安らって

いられないんですもの, そんな王にこの国が愛せるの.

彼は若い頃から私たち若者と共に過ごしていないんだもの,

私たちの言葉が彼の胸に響くことなんてないわ,

そんな王が私たちと, 父と子 (Söhne) の関係になれるの.

365

乙女ヨハンナは現実世界を「敵意に満ちた」ものと見て, それを善く支配できるのは「嫉み」を知らない国王だけと考えている. 彼は産業を守り, 都市を発展させてくれる人間であり, 同時に「慈悲」の心を持ち, 善良な国民と理解し合えるのにはその国で生まれ育った者だけであって, 他国の者にはそれができないという民族主義者でもある. これはナチスの「遺伝生物学」に則り, アーリア人種 (ドイツ人) は最も優秀で, 劣等な「血」を持つユダヤ人はドイツの「地」から抹

殺しなければならない、という「血と地」(Blut und Boden)の政治とは無縁のもので、相互理解のための言語と共通体験という文化的なものである。それを基にして、このフランスに天上の父なる「神と人間」の関係に似た「父と子」の関係がイギリスの侵略前にはあった、またはそういう関係にすべきであると思っている。しかし、これはこれまで見て来た歴史上の国王と人民という支配関係とは程遠いもので、少女の単なる夢に過ぎないとしか言えないだろう。王妃イザボ、オルレアンやブルグント公爵家の社交と宴会の費用は人民への徴税で賄われるしかなかったのであり、これに対し歴史上の人民はしばしば蜂起に立ちあがっていた。こういう実態はまだ世事に疎い乙女の口からはもちろん聞こえてこないし、ドンレミ村民の台詞でも報告されていない。この両者に共通しているのはイギリスの侵略に対する怒りと恐れ、そして太子とブルグント公が同じフランス人同士で敵対・対立していることを止め、和解してくれればという儂い希望である。乙女はこの現実に対して、積極的に怒りをイギリスにぶつけ、希望を胸の内で儂いままにして置くのではなく、実現しようとする。それに対して父親ティボは、

神さんがフランスと王様をお守りくださるように。
わしらは平和向きの百姓で、刀の振り方も、
軍馬の手綱さばきも分かりません。誰が勝って、
わしらの国王になるか、それは運命に任せて、
静かにじっと待つことにしましょうや。 370
勝敗の運を決めなされるは神さんで、とにかく
ランスで聖油を受けて、王冠を頭に戴かれるお方が
わしらのご主人さんになるんだからな。

さあ、仕事にかかった、かかった。皆それぞれ
手前のことだけ考えてりゃ良いんだ。この領地を 375
巡る丁々発矢は、この世のお偉い領主さん方に任せて、
わしらは静かにその破壊を、ただ眺めてりゃ良いんだ、
わしらが耕す大地は、そんな嵐にやびくともせん、
炎がわしらの村を焼き払っても、
あいつらの馬がわしらの播いた種の芽を踏みつぶしても、 380
新しい春になれば、新しい芽が出てくるし、
わしらの粗末な小屋なら、アッと言う間にご復活だからな。

人生経験を積んだ父親は百姓の分際を心得ている。フランスの独立は王様に託し、その国王を守るのは神に委ね、傍観者であるしかない農民たちはランスで戴冠する勝者を国王として受け入れるわけである。この最後の台詞に至っては自己嫌悪のような、やけっぱちな気持ちがよく出ていないだろうか。とにかくこの父親はあの娘の言動には呆れはて受け付けず、野良仕事へと追い

立てている。預言者は故郷では受け入れられないようだ¹⁵。

それでヨハンナは故郷に別れを告げて、

さようなら、お前たち山々よ、大好きだった牧場よ 383

(中略)

ヨハンナは行って、もう再び戻って来ないの 392

(中略)

子羊たちよ、もうお前たちの群を導く者はいなくなるの、 396

だって私はあっちの方で、危なくて、血が流れる野原でね、

他の群れの番をしなくっちゃならないの、

そうしなさいって、霊が私に命じたの、

(中略)

その方がこの木の枝の中から、私に言われたの、 406

「行け、お前は私があることを、この世で示すのだ」と。

彼女は神の命を授かったと思っている。略した第 401-6 詩行で、「その方」は旧約に出てくるモーゼ、そしてイザイアスの息子に預言した神であることを明かしている。それはイエズスを地上に遣わした父なる神である。しかし、向かいに聖母マリアの礼拝堂があるにしても、あの問題の樫からその声は聞こえて来たのだ。そして、その命はこう続く。

「粗い鉄をお前の手足に巻きつけ、

鋼でお前の柔らかい胸を包むのだ、 410

男どもの愛に、お前の心はこの世の情欲という

罪深い炎で触れてはならない。

花嫁の花輪がお前の巻き毛を飾ることなどないであろう。

可愛い赤子がお前の胸にすがって華やぐことはないが、

お前をきっと、この世の女たちの誰も及ばぬ 415

戦士の荣誉で美しく飾ってやろう。

最も勇敢な者たちも戦いの中でおじけづき、

フランス没落の運命が近づく時、

その時お前は、フランス王の旗を高く掲げ、

麦刈り女がザクッと刈るように 420

勝ち戦におごる者をなぎ倒すのだ、

奴らの幸運を乗せてきた車をひっくり返し、

フランスの英雄たる息子たちを救出し、
ランスを解放し、お前の国王に戴冠するのだ」。

一つの印を天は私に約束して下さり、425
今ここに兜を送って下さった。これは天からの授かり物。
この鉄物かなものから神々の力 (Götterkraft) が私に乗り移り、
体中が天使ケルビムの勇気で、凜々と燃え上るようで、
戦いの最中へと、何かが私を引っ張り込もうと、
嵐のように荒々しい何かが、私を駆り立てているわ、430
戦いの合図が聞こえ、私の背筋に沁みわたる、
軍馬は棹立ちになり、ラッパが鳴り響く。

第 409 から 24 詩行までがヨハンナに榎の木から命じた声である。この第 432 詩行で、戦火がまだ及んでいない牧歌的な自然の故郷を舞台とした前場は終わり、そこから乙女ヨハンナは第 1 幕に、神の戦士として百年戦争という歴史の舞台に登場するのだが、「高慢なイギリス軍を打ち破り、ランスでフランス国王の戴冠式を挙行せよ」という預言を携えてである。ここで重要なのは、その実現を故郷の村人 (人民) も望んでいることであり、それ故ヨハンナは神に選ばれた人民側からの民族主義の代表である。しかし問題なのは、その神託がどのような神から預けられたのかであり、ジプシー女からの兜をヨハンナは神からのものと思っていることである。それを被っていると、一神教のキリスト教徒の彼女なのに、体内に「神々」(Götter) の力が満ち溢れて来るのである。異教徒の、その中でも古代ギリシア・ローマの神々が登場人物の種々な気持ちと感情という姿をまとめて登場しているかのように見える。かつてシラーは「ギリシアの神々」(Die Götter Griechenlands) でこう歌った。

美しい世界よ、汝は今どこに？
戻って来てくれ、自然が全盛だった時代よ。90
(中略)
あらゆる (神々の) うちで、一柱を富ますために99
この神々の世界は滅びなければならなかった。¹⁶

その世界が第 1 幕以降、キリスト教の神も含めて展開するのだが、黒騎士以外神々が直接登場することはないにしても、ホーマーの英雄叙事詩を思わせる登場人物の描写を通してである。

太子の仮宮殿では

第1幕の舞台はカール太子の仮の宮殿である。そこでカールは愛人アグネス・ソレル¹⁷ (Agnes Sorel 1422-50) を楽しませるため、「オルレアンが危ない」(443) というのに、芸人を呼んで、愛人のための宴を催している。このような国王に愛想を尽かし、「元帥は預かった剣を返却し」(455)、出て行ってしまった。そこにデュノワ男爵が登場するのだが、この男爵はオルレアン公の庶子である。この町は王党派の重要な町であるので、当然それを救おうと太子は出陣の用意を整えていると思いながら来て見れば、この様子で、彼は立腹する。しかしこのカールを、ヴォルテールの聖人が訪れた時の性人カールとは少し、もちろん王妃イザボとは大きく違う「愛」の太子に、シラーは設定している。先ず彼は芸術愛好家で、呼んだ芸術家に謝礼を払ってやるよう命じて、

高貴な歌人^{うたびと}を

予の宮廷から、手ぶらで、帰してはならぬぞ。
 彼らは干からびた王笏に花を咲かせ、
 実をつけることのない王冠に、枯れることのない緑の
 生き生きした枝をあしらってくれるのだからな。 480
 彼らは支配者と同じように、支配的に振る舞い、
 軽々と望みどおりに自分の王国を築いてしまうし、
 その帝国はこの世のものではないので、無害とくる。
 だからな、歌人は国王と同じ身分でな、
 両者は共に人類 (Menschheit) の高みに住んでいるのだ。 485

この文人太子の水準がどの程度のものかは、彼が呼んだ者が「手品師と吟遊詩人」(457f.) であるところを見ると、彼の芸術論はともかくとして、それほどレベルは高くないと言えよう。本物の芸術家は現実と格闘して自己の世界を創造するが、カールは彼の親戚であるネアーペル国王に倣って、かつての騎士文化にあった武と愛の后者だけに懐古趣味的に浸り、フランスの現実から目をそらして、

彼 (ネアーペル王) は昔の時代を取り戻そうとされているのだ。
 そこでは優しい愛 (Minne) が支配しおってな、その愛が
 騎士どもの偉大な英雄心を高揚し、
 ご婦人方は裁判官の席に座り、 620
 繊細な感覚で、あらゆる上品なものを吟味しておった。

その時代に、その晴れやかな御老公は住み、
あの時代がまだ昔の歌に生きているようにな、
金色の雲に浮かぶ天空の町のように、老公はあの昔を
現代の地上に移植しようとされておりおるのだ 525
公は愛の宮廷を建てられたのだ、
そこを目指して高貴な騎士たちが巡歴して来ると、
そこには華やかな淑女たちが上の席に座っている、
そこに本当の愛 (reine Minne) を再来させようと、
公は予を愛の君主にしようと選ばれたのだ。 530

カール太子は騎士としてソレルとの間にこのような愛を実現しようと思っていたのだが、この
ようなドン・キホーテぶりに呆れ、デュノワは、

愛の力を誹謗するような輩から
私はこしらえられたものではありません。
その観点から見れば、私はまさに愛の息子で、
私が受け継いだものは、すべてその国にあるのです。
私の父はオルレアン公で、 535
彼に抵抗できた女心などありませんでしたが、
彼に落とせないほど堅固な敵城もありませんでしたぞ。
あなたご自分を愛の君主に相応しいとおっしゃりたいなら、
勇者の中の勇者におなりなさい。 私が
読み知った昔の愛の書物によれば、 540
愛にはいつも騎士の武勲が付きものでしたぞ。

騎士文化には愛と武がペアになって初めて成立したものであるが、カールにはその片方の武が
ないと、主人である太子を彼に仕えるべきこの男爵は批判している。そこにオルレアン市民の代
表が登場し、イギリスの同盟軍に陥落寸前にまで追い込まれている窮状を知らせ、この市を救う
ために軍を送ってくれるよう訴える。続いてそこに、カールが最も頼りにしているスコットラン
ドの傭兵が「今日にも未払いの給料を払ってくれなければ、ずらかるぞ」(587f.)と騒ぎ出した
という報告が来る。軍用金とはとくに底をつき、これまで領国を抵当にした借金で何とかしのい
できたが、もはやそれも叶わずという逼迫状況が明らかになる。オルレアンには「援軍を送って
くれ」、傭兵には「金を払え」と迫られ、カールは絶望的に、

予が地団駄を踏めば、地から軍隊が出てくるか。

予が手を広げれば、麦畑になるか。
予を切り刻んで、心臓を引っ張りだし、
金の代わりにそいつを鑄造しろ。お前たちのために出す
血なら持っているが、予には銀貨も、兵士もないのだ。 600

ここに太子の愛人ソレルが登場し、彼女は自分の愛する男が置かれている状況を知り、自分の装飾品、宝石類さらには領地までも提供するから、傭兵に給料を払って、引き留めるよう申し出て、太子に向かい、

私は全てを喜んであなたに捧げなかったでしょうか。 635
それは金や真珠より、もっと大切なものでしたのよ。
それなのに今は、私の幸福を私自身のために取って置けなんて。
さあ、私たちの人生に余分な飾り物はすべて投げ捨てましょう、
先ず私に、その自己犠牲の高貴な例を示させて下さいね。
次にあなたはお取り巻きを兵にし、あなたの金は 640
鉄に変え、持っていたらっしゃる物で王冠だけは残して、
他の物はすべて、きっぱり投げ出して下さいませ。
さあ、そうして、共に不足と危険を分け合いましょう。
軍馬にまたがって、私の柔らかな肌も
キラキラと刺してくる太陽の矢に曝し、 645
私たちの頭上に漂う雲を天井に、
石を褥しとねといたしましょう。
粗野な戦士も、自分の国王が極貧の民のように
辛い境遇で、不自由を忍んでおられると見れば、
自分の苦しみも痛みも、ジッと耐えてくれるでしょう。 650

ヴォルテールのソレルは国王が出陣する時、柔らかな褥で抱擁の夢を見ていたが、シラーの彼女はまさに「愛人」以上の者として形象され、さらにあのイザボと対照をなしている。彼女は賢女で、太子を励まし、愛している。彼はこれを聞くと、微笑み、

そうだ、今や昔の予言 (Weissagung) が現実のものとなった、
クレルモンの修道女が予言者の (prophetsch) 霊に
憑かれたように予に語った、あの言葉がな。
その修道女が言うにはな、「一人の女が
予をすべての敵に優れた勝者にして、祖先たちの 655

王冠を予のために勝ち取ってくれようぞ、
ということだった。予はその女をはるかなる敵の陣営に求め、
母の心がなだめられたらと望んだが、予をランスに
導いてくれるその女傑は、今ここにいるではないか。
アグネスの愛によって予は勝つであろう。

660

この太子カールはどうも男らしく、自ら積極的に決断できず、何かに頼りたがるようだ。ところで、中世フランスの「クレルモン」と名指されてはいるが、「予言」とか「予言者の」という言葉とその内容は、古代ギリシアのデルポイにあるアポロンの神託を感じさせないだろうか。これが前述したように、中世キリスト教の支配するフランスにありながら、様々な古代の神々が出てくるシラーの設定した舞台である。この「神託」とその謎解きは、まるでゾフォークレスの『オイディプス王』を想起させないだろうか。そして、その王に派遣されたクレオンがアポロンの神託を持ちかえるように、太子が二つの命を託して遣わしたラ・イルールがその外交工作の結果を持ち帰る。先ずその一つは、イギリスと同盟している血縁の親戚であるブルグント公との和解に関するものである。

前項で触れたように、1419年ブルグントのヨハン公は戦中マンテロ橋の上で太子の側近によって殺されている。その子フィリップ (Philipp der Gute, 1419-67) が現在のブルグント公で、この彼は外交工作に来たラ・イルールに、和議などという話の前に、「いきなり、こちらの話には耳も貸さず、わしの父を殺した、名をデュ・シャテル¹⁸という奴をこちらに差し出せ」(681f.)と、私怨剥き出しの要求をしてきた。その彼にラ・イルールは太子から預かって来た手袋を投げ、太子は一騎士として国を賭けた決闘で、これまでの決着をつけようとしておられる、そう告げると、彼の方は「きっと自分のものになる国のために、そんなことをする必要など、わしには更々ないわい。そんなに戦いたいなら、オルレアンの前でわしに会えるだろう。わしは明日そこに行くつもりだからなと応え、ワッハッハと笑いながら背を向け」(691ff.)、去って行った。このブルグント公の言葉は、臆病にもシノンの宮殿に引きこもっている太子に、そこを出て、オルレアンを援けに來い、そこでお前を打ち取ってやる、という挑発である。

太子に託されたもう一つの外交工作は、あの「神託」解釈の最初のもので、イザボの母親としての心に望みを掛けるものであったが、前前項で見たとおり、カール憎しで凝り固まっている彼女のサン・ドニ教会での振る舞いを報告されると、太子は「母上、ああ母上」と絶望の声を上げるしかなかった。そして今はあの預言を解釈し直し、ソレルの愛に望みを託している。しかし現実には厳しく、オルレアンのデュノワ男爵やその市民代表、そしてソレルもこの太子に戦うよう勧めるが、軍資金は底をつき、兵力は給金遅配で騒いでいる傭兵だけで、最後の望みだった外交工作も失敗したため、太子はオルレアンの救援を諦める決心し、否それどころか、もはやこのシノンも捨てて、ロワール河を渡り、退却するしかないと考える。デュノワはこんな太子に、

それではもう 850

永遠にあなたは勝利の神から背を向けられ、
あなたの祖国からもですぞ。あなたはご自身を
お捨てになったのだから、私もあなたをそうしましょう。
あなたを王座から突き落とすのは、イギリスとブルグントの
連合軍ではなく、あなたご自身の小心ですぞ。 855
フランスの国王たちは生まれながらの英雄でしたが、
あなたはどうも戦い向きには作られなかったようですな。

(オルレアンの市参事官たちに向かって)

国王はお前たちをお見捨てになる。だが私は
我が父の町オルレアンに我が身を投じ、
その瓦礫の下を我が墓にするつもりだ。 860

こう言って立ち去ろうとする彼をソレルは止めようとするが、太子はデュ・シャテルに退却の準備を命じ、その言葉を聞いたデュノワは彼を留めようと掴んでいた彼女に向かって「おさらば (Lebet wohl!)」(872) と言い残して去る。ブルグント公の私怨の原因を作ったデュ・シャテルは我が身を彼に差出し、その公の心を和らげ、この事態を改善するよう太子に直言すると、カー

もう何も言うな。予を怒らせるな。 900

10の帝国を背にして、出て行かなければならないとしても、
予は友の命と引き換えに、助かりたいとは思わぬ。

お前は命じられたようにしてくれ。行って、予の
軍の武具を船に積むように、そうしてくれ。

この台詞だけから見れば、内容は明らかである。太子はオルレアンに近いシノンから撤退し、その市を見捨て、ロワール河を越える準備を命ずるが、それはデュ・シャテルを犠牲にしてまでその町を救う必要はない、つまり一人の側近・友人の方が一つの町より重要だと考えている。彼は政治・軍事に関する権力の縮小を犠牲にしてまで、友愛の方を選択したのだ。そして愛人アグネス・ソレルの手を取って、

悲しまないでくれ、アグネス。 905

ロワールの向こうにも、フランスはあるのだ。
二人でもっと幸福な地 (Land) に行くのだからな、
そこでは雲に覆われない、穏やかな空が笑い、

そよ風が吹き、もっと優しい風習が二人を
迎えて入れてくれるのだからね。そこは歌に満ち溢れ、 910
もっと美しく、生と愛が花開いているのだよ。

その地から離れ、育った都パリからさらに遠ざかり、南へと落ちて行く太子に同情するソレルの短い台詞がこれに続く。彼女は最前までカールを戦うよう励ましていたが、今は同情しこそすれ、彼を男らしくないなどともはや批判しない。彼女は太子であるカールの愛人であったのではなく、個人としてのカールを愛していたのである。シラーは男漁りに耽る王妃イザボに対して、現世の男との愛を神に禁止された乙女ヨハンナを対極に置き、その二人の間にこの二人の愛を置いているのではないだろうか。意図的に飛ばしたのだが、オルレアンへの出陣を断念した時、カール太子はこう言っていた。

予にできることは、すべてやったのだ。
我が身を騎士らしく、王冠を賭けた決闘を
申し込んだが、それも断られた。
予の民 (Volk) に命を無益に捨てさせ、 820
予の市と町を灰燼に帰すことになる。
あの自然に反する (unnatürlich) 母のように、剣で
予の子 (mein Kind) の町と市を二つに分けるというのか。
それはできぬ。子が生きられるよう、予は子を諦めるのだ。

彼の母は「自然に反」し、自分の子に剣を振るってくるが、その子である彼はそんな彼女と同じ類になりたくない。フランスの太子としてはオルレアン市とその民も、ブルグント公とその配下の兵も、そして自分の味方も同じ子であるので、ここで出陣すればその同じ子を敵と味方に二分し殺し合わせることになる。彼が援軍を送らなければ、オルレアンは町を明け渡すことになっているのだから、無益な血を流さなくても良いという論法である。この太子は文武の武には欠けているようだが、かつての騎士文化の片方の愛にあこがれる平和的民族主義者と言えよう。その彼に対し、ヨハンナは神の命に生きる戦士として、好戦的民族主義者である。前述したように、彼女は国王と人民の支配と被支配という関係を父と子の愛のように夢見ていたが、この太子も同じようにそう見ている。全知の神はそうであるがゆえ、この太子に欠けている武を補う戦士として彼女を送ったのだろうか。シラーはそのようにも考えられる台詞を所々に挿入しているが、この第1幕の場では、男らしくないカール太子と勇敢なデュノワ男爵を対照的に描き出し、全体の流れとしては後者に観客の共感が向かうよう創作している。

とにかく、シノンの宮廷はこのような切羽詰まった状況で、太子は決断し、退却を命じた。そこに突然、連敗に次ぐ連敗のフランス側が勝利したという知らせがもたらされ、肩を落として帰

りかけていたオルレアンの使節も、怒ってオルレアンに去りかけていたデュノワも呼び戻される。そして、あの寒村ドンレミという名の故郷を捨てた乙女ジャンが歴史上に、この半人前の太子の仮宮殿に登場する、その場が次に続く。

未完

【引用・参考文献】

本文中の () 内と引用詩句の左の数字は紙の節約のために、次の版がシラーのこの作品に付した詩行数に依った。Schillers Werke, Nationalausgabe, Hrsg. Benno von Wiese u. Lieselotte Blumenthal, Weimar, Hermann Böhlau Nachfolger 1948. B. 9.

1 この生年月日は Meyers Konversations-Lexikon 4. Aufl. Leipzig u. Wien. Verl. des Bibliographischen Instituts, 1890. in 19 Bdn. B. 9. S. 183. によるが、Der große Brockhaus in 12 Bdn. 1979. B. 6. S. 9. では「1410と1420年の間」とあり、それは現代の科学的厳密さに従えば、特定できないことを示している。レクラムの1992年印刷の „Erläuterungen und Dokumente. Friedrich Schiller, Die Jungfrau von Orleans“ では、この作品の「素材と伝承」で、「歴史上のジャン・ダルク」が生きながら火あぶりの刑に処せられた時、「彼女は19歳であった」(S. 46.) とある。この19という年齢は19世紀末の百科辞典の記述に合っている。それ故シラーはこれと同種の典拠に従って創作したと思われるので、そちらの方を記した。

また、Jeanneの発音はフランス語でジャン [dʒa(a):n], 英語名はJoanとなり、その発音はジョアン [dʒoan] である。日本ではジャンヌと呼ばれているが、どうしてその発音になったのだろうか。なお、その名はドイツ語ではヨハンナ (Johanna) となり、シラーもそれを使っている。

2 本文中に記したように、在位の始まりが1422年と1429の二つあるのは、こういう事情からである。彼の父である先王が亡くなった年からとすれば、前者から始まるのが普通である。しかし、その同年に百年戦争のライバルであった英国王ハインリッヒ5世 (Heinrich . 在位 1413-22) も亡くなり、その子がハインリッヒ6世 (Heinrich . 在位 1422-61) として英国王となり、同時にフランスの伝令使はサン・ドニ (Saint-Denis) 大修道院で、「神の恵みによりフランスとイギリスの国王となられたハインリッヒ6世万歳」を叫んでいたし、太子の方はそれ以前からパリとブルゴーニュに「王太子」としての資格を認められず、彼の狭くなった領地を逃げ回っていたというのが実情であった。後者の1429年は、乙女ジャンの助けにより、ランスで正式に戴冠した年である。

3 作品、手紙などの引用は Schillers Werke, Nationalausgabe, Hermann Böhlau Nachfolger, Weimar 1948ff.により、それを NA と略し、次に巻と頁数を示す。NA. B. 42. S. 305. u. 636f.

4 Vgl., Erläuterungen und Dokumente; Friedrich Schiller, Die Jungfrau von Orleans. Reclam, Stuttgart, 1992. S. 53f.

5 Vgl., ebda. S. 55.

6 Vgl., ebda. S. 65-61. 以下この節の括弧内は、これに依る。

7 Vgl., *Das Buch der Richter, Elberfelder Bibel*, R. Brockhaus Verlag Wuppertal. 2. Aufl. S. 339.

8 ヨハンナを連れ、太子に紹介した歴史上の人物で、名はRogerではなく、Robert.

9 *Friedrich Schiller/ Angebot und Diskurs*, Hrsg. Helmut Brandt, Aufbau-Verlag, Berlin und Weimar 1987. S. 27.

10 ebda., S. 26.

11 Meyers Konversations-Lexikon, Verl. des Bibliographisches Institut, 4. Aufl. Leipzig und Wien 1890. B. 9. S. 26.

12 マルニャクはオルレアン家の若い後継ぎカール (Karl 1391-1465) に娘を嫁入りさせ、その家をほとんど牛耳っていた。そしてこのオルレアンとブルグント両家の争いが、フランス王家対イギリスとの争いと重なり、さらにその王家の主人は狂人であったため、このアルマニャクは国王軍の最高司令官

になっていたわけである。

- 13 この戯曲では、パリ・サン・ドニ教会での戴冠式の状況を太子に報告するラ・イールの台詞 (718) で一度名前が出てくるだけで、戯曲内でイギリス側の中心人物は騎士トルボトとライオネルである。
- 14 Vgl., 注 11 の出典と同じ。この百科事典は前々世紀出版であるため古い事項に関しては、現代の事典にはない、このような詳細な記述がある。
- 15 聖書にはこのような記述が多くあるが、例えば「ルカによる福音書」第 4 章第 16-30 節参照。
- 16 NA. B. 2. S. 366.
- 17 歴史上の彼女がカール 7 世に影響力を持つのは 1442 年からで、ヨハンナが登場する 1429 年よりずっと後のことである。シラーが彼女をここに移したのは、ヨハンナ、イザボそして彼女という三人の女の違いを対照的に描き出すためであろう。
- 18 歴史上の Tanneguy Duchatel (1368? - 1449 ?) は太子と懇意にしていた人物というだけで、この戯曲で描かれている時代の宮廷でも戦場でもそのような役は何も果たしていない。